

シリーズ

東久留米の学校史

その2

成蹊学校と共立学校

明治維新の混乱期において、各村々は新政府の政策に沿って、それまでの手習所などを活用しながら初等教育機関の整備に努力してきまし

た。そのなかから明治10年(1877年)に誕生したのが、成蹊学校と共立学校です。前沢村・下里村・柳窪村の学校が合併して成蹊学校となり、小山村・落合村・門前村・神山村・南沢村及び新田の学校が合併して共立学校となりました。『小学合併願』(合併議定之事等)。明治10年の『日本国文部省年報』(国立国会図書館所蔵)によれば、

〈表1 成蹊学校と共立学校の変遷〉

Table with 7 columns: Year (明治10年, 17年, 18年, 19年, 22年, 36年, 39年) and School Name (村/制度等, 前沢村, 下里村, 柳窪村, 小山村, 落合村, 門前村, 神山村, 南沢村, 柳窪新田, 栗原新田). It details the evolution of schools from 1877 to 1933.



↑写真1は成蹊学校(大正8年撮影)。正門から撮影したもので、右側が教室。撮影時は西分教場で、正面が村役場でした(市指定旧跡)。写真2は共立学校(大正5年撮影)。校舎の前には2本のヒバの木が立っています。撮影時は東分教場でした(市指定旧跡)。

成蹊学校は、明治17年(1884年)12月に前沢村609番地(現八幡町2-10)に独立した校舎が新築されました(写真1)。所沢街道に面した、現在の市こみ対策課のある場所です(市指定旧跡)。新築された建物は、敷地301坪(学校所有地)、建坪75坪5合、間口11間・奥行3間半の凹型をした木造平屋茅葺き屋根の校舎で、玄関をはさんで両側に15坪の教室があり、廊下に面して12坪の教室・応接室・客間・教員室が並び、その奥に台所や便所が配置されていました。

開校時は、校長兼教員の島崎保平氏と補助員3名が置かれ、前沢村・下里村・柳窪村(260戸)の生徒175人が通いました。学費は個人負担で、当時の戸長役場発行の3カ月分や5カ月分の学費納付書(3カ月分34銭)も残っています。また、この頃の小学校は秋入学(9月)が一般的でした(全国的に4月入学となるのは明治33年)。

明治19年(1886年)に『小学校令』が公布され、尋常小学校4年間が正式に義務教育となり、成蹊・共立ともに尋常小学校となりました。卒業後は4年間の高等小学校に進学できますが、当時の高等科は田無学校に設置されていました。明治22年(1889年)の市制町村制施行により、両校を所管していた8村2新田が合併して久留米村が成立してからは、成蹊学校の村役場が併設され、玄関正面の部屋で役場事務が行われるようになりました。

そして、明治39年(1906年)、前沢(現第一小学校の向かい側)に村名を付した久留米尋常高等小学校の本校が開校し、成蹊学校は西分教場と名を変えて、小学校低学年の子どもたちが通うことになったのです。

共立学校は、前年(1905年)に新築された成蹊学校に続いて、明治18年(1885年)10月に南沢村673番地(現本町4-13)に新築開校しました(写真2)。

当初は、校長兼教員の村中音吉氏と補助員3名が置かれ、小山村・落合村・門前村・神山村・南沢村・柳窪新田・栗原新田(173戸)の生徒150人が通学しました。学費はやはり個人負担でした。明治30年代初頭に義務教育の国庫補助制度が確立し、学費の個人負担が原則廃止となったのは明治33年(1900年)のことです。共立学校も明治39年の本校の開校とともに東分教場と名前を改めて、昭和

3年(1928年)に南沢1094番地(現南沢交番付近)に新築移転されるまで、長く小学校低学年が学ぶ分校として活用されました。このように成蹊学校と共立学校は、東久留米市の公立学校の実質的な母体となり、現在の小学校の礎を築いたのです(続く)。

われら 市民大学

地域の教育力が大きく見直されています。市の委託事業として、多くの市民が自主的に学んでいる「市民大学」。前号では市民大学の由来、歴史について紹介しました。連載最終回の今号では、「市民のための学問」の建学理念を貫いている、市民大学の特色ある運営について、同運営委員会会長・佐藤柳次郎氏に紹介していただきます。

市民大学が開講(平成12年)以来、変わらず持ち続けている使命がある。それは「講義の内容は市民の身近な暮らしの中にある、エネルギー、環境問題、防災、食と農、教育問題まで、さまざまな角度から取り上げ、内容の濃いものにする」というものである。座学だけではなく、課外講座ではバスを仕立て、日の出町ごみ処分場、都水道歴史館や旧岩崎邸、国会議事堂、さらに東京大学、皇居東御苑等々の見学も行う。また、市内にある自由

学園に向き講義のプレゼンテーションを受けたり、学園の建造物、樹木や草花の観察も兼ねたユニークな見学会もあり、例年、受講生から好評を博している。その年度のカリキュラムの編成に当たっては、1年がかりの作業を要している。

受講生の中には平成13年度に実施した「災害に強いまちづくり」の講座終了後、有志による「防災まちづくりの会・東久留米」を立ち上げ、地域防災力の向上、次世代の防災教育のため、目覚ましい活動を続け、まちづくりの一翼を担っている方々がいる。また、講座では地域について学び、知り得たことを生かして、ボランティア活動に積極的に参加し、自己実現している方も

いる。市民大学がなぜこれほど自主的に、いわば市民手作りの「市民大学」は珍しく、近隣市からも設立に関するノウハウの問い合わせが寄せられている。受講生の中には平成13年度に実施した「災害に強いまちづくり」の講座終了後、有志による「防災まちづくりの会・東久留米」を立ち上げ、地域防災力の向上、次世代の防災教育のため、目覚ましい活動を続け、まちづくりの一翼を担っている方々がいる。また、講座では地域について学び、知り得たことを生かして、ボランティア活動に積極的に参加し、自己実現している方も

第7回中学生「東京駅伝」大会に出場しました

～男子チームは他区チームと同時にゴールに飛び込み、ドラマチックな第10位～



↑走りきった後の充実感あふれる顔で記念写真をパチリ(写真上は出場した男子チーム、下は女子チーム)。

2月7日(日)、味の素スタジアム・都立武蔵野の森公園(調布市)を会場に、第7回中学生「東京駅伝」大会が開催されました。女子の部は午前10時にスタートして30kmを16人で、男子の部は午後1時にスタートして42・195kmを17人で走りました。選手は各区市町村(23区・26市・1町)から選抜された中学校2年生です。

今年の東久留米市の結果は男子が10位(11位)で敢闘賞、女子が23位(24位)、総合16位(17位)と大健闘しました(カッコ内は昨年度の順位)。ゴール直前、大きなドラマがありました。東久留米市の男子のアンカーが前を走る選手にゴール直前で追いつき、ほぼ同時にゴール。「今のどうだった!」。ドキドキしながら結果の発表を待っていると、「第10位東久留米」と電光掲示板に映し出された瞬間、クラスや部活の友人、保護者、校長や先生方などの応援団から大歓声が上がりました。

出場する選手を送り出すに当たり、昨年12月8日、市役所で壮行会を開催しました。劇的な場面を見た教育委員からは、「(壮行会でも)監督、コーチ、選手全員から『やるぞ!』という意気込みが伝わってきた。今日の走りを見て、まさしくその通りだった」との感想がありました。